

日本海水学会第二回若手の集いを終えて

市村 重俊*

日本海水学会第53年会上先立ち、学会場でもある東京大学の山上会館にて第二回若手の集いを開催しました。開催日の6月4日(火)は日本全国が心待ちにしていたサッカーW杯の日本の初戦が行われた日でもありご記憶の方も多いのではないのでしょうか。そんな今回の若手の集いを担当者の目で振り返ってみたいと思います。

開催までの裏話

担当を任された後、どうすれば参加者の人数を増やすことができるのか(学会員の増強につながるのか)を他の準備委員・実行委員の方々、さらには前回の担当者である九州大学の後藤先生と相談しながら準備を進めてきました。当初は楽観視していたのですが現実には厳しく事前の参加申し込みは前回とほぼ同数。開催日が近付くにつれ「参加者を増やせ!」という無言のプレッシャーと戦うことになりました。当日の内容にはさらに悩まされましたが、最終的には「会員間の親睦を深め、若手の集いの継続につながる内容」ということを意識して開催することにしました。

当日の状況

当日は申し込みのあった11名の他に、学会場の準備にあたっていた東京大学中尾研究室の学生のみなさんにも参加してもらいました。まず後藤先生から若手の集い発足の経緯を簡単に説明してもらい、さらに全員が自己紹介をした後、立食形式で食事をしながら自由に歓談する時間を持ちました。もちろん日本戦の途中経過を交えながら、こちらの心配とは裏腹に時間は刻々と過ぎ、やがて隣の部屋から会場を埋め尽くすほどの評議員の方々(こちらから参加を打診した当初は数名程度という話だったので嬉しい誤算でした)。その後、柘植学会長と中尾実行委員長から、海水学会の現状と若手研究者への期待を込めたお話をいただきました。最終的な参加者は35名程度となり、試合終了のホイッスルと時を同じくして盛況のうちに集いは終了しました。写真は解散前に参加者全員で撮

影したものです。

今回の反省とこれから

担当者として、せっかくの集まりを活かした話し合いが何もできなかったという点を反省しています。ただ、個々が自由に交流でき、さらには(短い時間でしたが)若手と評議員の方々(が)が直接話をする機会を持ったという面で収穫の大きな集いを開催できたのではないかと考えています。今回は残念ながら企業の方の参加はありませんでしたが、今後は、若手の集いの参加者のほとんどが関係したポスター発表と同日開催にする、何のための集まりなのかを積極的にアピールするなど、より参加しやすい環境作りが必要だと考えています。また学会側の若手研究者養成策へ期待する一方、若手の集いが一つの組織として自立する必要性も強く感じました。今回がその第一歩となることを期待して次回の担当者へ引き継ぎたいと思います。

補足 参加者には簡単なアンケートに協力していただきました。「これからも参加したいか?」という問いには全員がyesでしたが、「何のために?」という問いには、会員間の交流のためという答えと学会のためという答えが半々でした。また「若手とは?」という問いには、個人の意識次第という答えがほとんどでした。興味を持たれた方は年齢を気にせずぜひ次回から参加してみてください。



集いを終えて (撮影 小泉一樹君)

* 神奈川工科大学応用化学科 (〒243-0292 厚木市下荻野1030 ichimura@chem.kanagawa-it.ac.jp)
Kanagawa Institute of Technology, Department of Applied Chemistry